今を創った

続・山梨の先人 18

教育者 八巻 太一（北杜市出身）

沖縄の女子教育 心血注ぐ

太平洋戦争末期の沖縄戦の犠牲者を悼む「慰霊の日」の6月23日、沖縄本島最南端の糸満市に立つ「梯梧之塔」。雨上がりの空の下、76年前に学徒看護隊として従軍した吉川初枝(93)と同窓生の上原はつ子(92)＝いずれも那覇市＝は、同窓生らに手を合わせた。この日、梯梧之塔を訪れることができた同窓生は2人のみ。「23日だけは、どんなことがあっても行かなくちゃと思っているの」

戦前の沖縄で女子実業教育を掲げて開校し、戦火の中、わずか15年足らずで廃校となった私立沖縄昭和女学校（後に高等女学校）。山梨県北巨摩郡江草村（現北杜市須玉町江草）出身の教育者、八巻太一が私財を投じて創設した。那覇市内を流れる川のほとりに立つ校舎の脇には校章にもなった梯梧並木が花を咲かせ、昭和高女の学徒看護隊は「梯梧隊」と呼ばれた。

元教員の記録によると、卒業生と在学生の総数は計800人余り。英文・和文タイプライターに簿記、珠算などの商業科目がある4年制で、2年間の専修科、6カ月の講習科には県立女学校を卒業後に学びに来る生徒も。食糧難で死者を出すほどの「ソテツ地獄」と呼ばれた大恐慌の中、満鉄（南満州鉄道）への就職者や後の実業家を輩出している。

私立沖縄昭和女学校時代の八巻太一＝那覇市内（昭和高女同窓生提供）

「アルファベットは26文字だからいいけれど、日本語はたくさんある。大変だった」と吉川は振り返る。4年生でタイプライターに触る前に教科書で英文・和文タイプの配列を覚え、簿記は数字の書き方から学び直した。タイプや会計の知識は、戦後の混乱期でも卒業生の就職に役立ったという。

恩給前借り

八巻の生まれは商家。魚や食品、酒、たばこを扱う雑貨店の長男として育った。同窓生や孫たちに映る姿は、謹厳実直、温厚、質素―。同時代の人物評には「熱誠家にして温言篤行、涙の人、思索の人、筆の人、時代を理解せる人、観察の鋭敏なる人…（中略）一度彼の風貌に接すれば自然とチャーム（魅了）さるる威あり」とある。

甲府・池田小の校長を務めていた1911年、八巻は元山梨県師範学校長の勧めで、33歳で妻子とともに沖縄へ渡る。「農村教育のため奮闘する」という使命を帯びた、明治政府が進める同化政策、皇民化教育の一環だった。小学校長として、就学率向上や二部授業廃止のため、家々を訪ねて就学を呼び掛けた八巻。沖縄県立第一高等女学校を50歳で定年退職すると、恩給を前借りして資金を工面し、私立沖縄昭和女学校を立ち上げた。

「私はかつて、祖父は皇民化教育の尖兵として、時の政府から沖縄に派遣された教育者だと考えていました」。千葉県で暮らし、2018年に亡くなった孫の故吉原久喜は八巻の足跡をたどり、後にそれは間違いだと気付いたと書き残している。

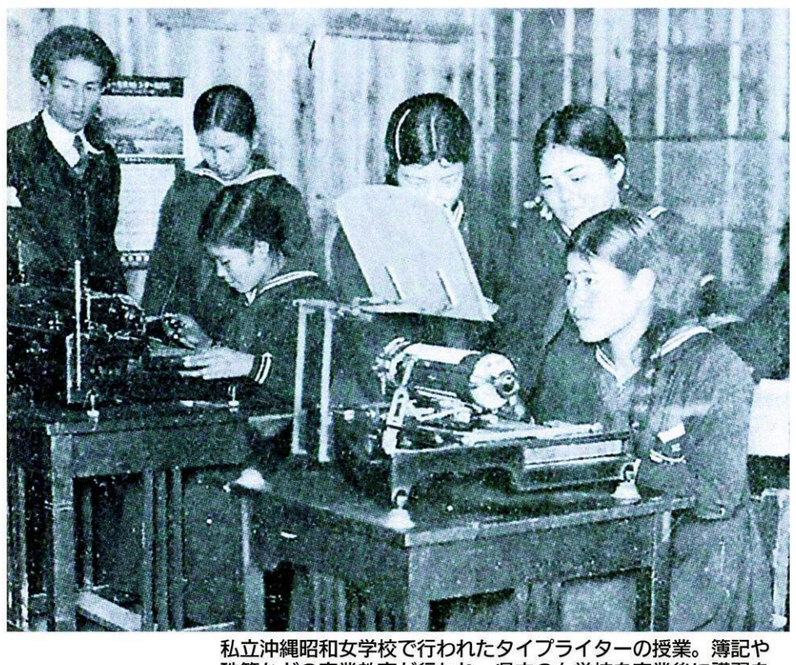
方言が禁じられ、罰として「方言札」を首にかけられた時代。当時小学生だった女性の手記に、あるエピソードが残っている。八巻の娘とウチナーグチ（沖縄の方言）で話して校長室に立たされたとき、県立女学校の教員だった八巻が校長室に駆け付け、「沖縄人がウチナーグチを使って何が悪いんですか」と抗議したという。

この頃、八巻は教育雑誌に寄稿し、盛んに女子実業教育の必要性を説いている。沖縄の中等学校入学者は男女とも5割に満たず、とりわけ女子の進学率が低いことを問題視。「男女の中等教育が、斯の如き差を生ずる事は本県の社会状態が不調和の発達不健全の社会が形成せられる事になるのは火を見るよりも明瞭」「女子の中等学校も卒業後何れの社会にも融通のきく様な教育施設を考へる事が必要」として、女子実業教育の充実を訴えた。

広がる支援

学校経営に当たり、東京、山梨のほか、沖縄のつてを頼りにフィリピンで資金繰りに奔走する八巻を支えようと、甲州財閥をはじめ山梨県人にも支援の輪が広がる。1940年、雑誌「甲州倶楽部」は、「八巻太一氏を援へ」という見出しで、高等女学校への昇格に向けて寄付を募る記事を掲載。賛同者の欄には貴族院議員や実業家、新聞社社長らが名を連ねている。

だが、太平洋戦争突入後、八巻の目指す教育は道半ばで頓挫。昭和高女の校舎は軍の弾薬庫として接収され、隣接する崇元寺境内に仮校舎を構えたものの、学生は陣地構築などに動員された。44年の十・十空襲後は軍医による看護教育が行われ、45年3月、4年生17人が野戦病院に配属された。地上戦で校舎は焼失。学徒看護隊の9人を含む約60人の生徒が命を落とした。



私立沖縄昭和女学校で行われたタイプライターの授業。簿記や珠算などの実業教育が行われ、県立の女学校を卒業後に講習を受けに来る生徒もいた（昭和高女同窓生提供）

八巻太一 年表

- 1878年（明治11年） 2月、山梨県北巨摩郡江草村に父儀一、母たけの長男として生まれる
- 1900年（明治33年） 山梨県師範学校を卒業。泉尋常高等小学校に勤務
- 08年（明治41年） 山梨県師範学校付属小学校代用池田尋常小学校校長に就任
- 11年（明治44年） 元山梨県師範学校長の勧めで沖縄に赴任し、読谷山尋常高等小学校校長となる
- 20年（大正9年） 沖縄県立第一高等女学校、沖縄県女子師範学校の教諭となる
- 29年（昭和4年） 沖縄県立第一高女、女子師範学校を定年退職
- 30年（昭和5年） 那覇市に私立沖縄昭和女学校（後に高等女学校）を設立。タイプライターや簿記、珠算などの実業教育を行う
- 50年（昭和25年） 沖縄戦で犠牲になった昭和高女の生徒や教職員の慰霊塔を学校跡地に建立（後年、糸満市に移設）
- 52年（昭和27年） 久米島でキリスト教の伝道を行う。疫病にかかり、9月に死去

学徒看護隊として動員され命を落とした沖縄昭和高等女学校の生徒や教職員をまつる梯梧之塔。辺りには梯梧の木が植えられている ＝沖縄県糸満市（2016年撮影、高野裕さん提供）

1930年に創立された沖縄昭和女学校校舎。校章にもなった梯梧（でいご）並木がある。1945年5月に地上戦で焼失した＝那覇市内（戦前、昭和高女同窓生提供）

戦後、米軍占領下の沖縄から故郷の義弟に当てた八巻太一の手紙。「私も沖縄の土になる覚悟で居ります」とつづっている。封筒には宛先に「日本」とあり、検閲で開封された跡がある

「あの頃は国のために死ぬものだと思っていた。今思えばばかなこと。日本人でありたいと思ったんでしょうね」と上原。流行歌のように軍歌を歌い、ナイチンゲールに憧れた。上原は在学中、タイプライターに触れずじまいだったが、戦後間もなく米軍施設で英文タイピストの職を得る。「通訳に教わって、見よう見まねでやった。八巻太一の女子実業教育は新しい時代に必要なものでした」

学徒看護隊の壮行式で「実戦の時がくれば学徒看護隊として身命を賭して従軍する」と訓示したという八巻。クリスチャンだった。終戦の1カ月後、疎開者らを集めて学校を開いている。教え子を戦場に送り出したことに対し、孫の山城武男(78)＝沖縄県宜野湾市＝は「じいさまは何も言わなかったが、慚愧の念があったのでは。慰霊祭を開くため方々駆け回っていた」と語る。

戦後の米軍統治下で、ウチナンチュ（沖縄の人間）の後輩たちが次々と県の要職に就く中、八巻らヤマトンチュ（本土の人間）は表舞台を去った。51年、琉球臨時中央政府と沖縄群島政府から米日琉球親善大博覧会の委員として委嘱を受け、派遣先の久米島でキリスト教の伝道を行っている。

昭和高女時代、八巻は宿直室に寝泊まりし、家にいないことが多かった。昭和高女再建がかなわないまま教職を離れた後は、家で聖書を読むことが増えた。家族と食事を取る前には感謝の祈りをささげ、日曜日は孫を連れて教会に通ったという。

聖書を知る

「なぜ同じ本を何度も読むの」と、孫の八巻幸男(86)＝沖縄県南風原町＝は尋ねたことがある。「これは一度や二度読んだだけでは理解できないんだ」。そう諭す祖父の聖書には、赤線が何本も引かれていた。「人と妥協しないで俺の道を行く、という人。堅物で、腹を割って話せる友人はいなかったのでは。戦後の祖父は孤独だった」

八巻がいつ受洗したかは定かではない。沖縄の初任校、読谷山尋常高等小学校（現読谷小）で今も歌い継がれる校歌には、「かかる眺めの学び舎に神の恵み 世のめぐみ」という一節がある。作詞は八巻。孫の妻で、自身もクリスチャンである八巻以世子(74)＝沖縄県うるま市＝は「初めて歌を聞いたとき、この人は聖書を知っていると感じた」と振り返る。

北杜市の元学芸員で、八巻の企画展を担当した浅川伯教・巧兄弟資料館の元館長、沢谷滋子(67)＝同市＝は「明治から大正期はクリスチャンの教師も多く、師範学校など甲府時代の交流で影響を受けた可能性がある」と指摘する。「明治の山梨の人々にとって、沖縄は異国のような存在。八巻は新しい国づくりへの志か、信仰か、いずれにせよ教育に対する強いミッションを持って渡ったはずだ」

戦後間もなく、八巻は故郷の義弟に宛てた手紙の中で、「私も沖縄の土になる覚悟で居ります」とつづっている。「平和条約でも済み自由に日本に文通が出来る時には飛行機ででも帰ります」とした約束は実現することなく、5年後の52年、久米島で疫病にかかり、74歳で他界。赴任して1年足らずだった。

「あの時代に情熱を持って女子教育に取り組んだ、進歩的な人だった」。めいの三井てる子(85)＝北杜市＝は語る。約10年前、新聞記事がきっかけで元女学生と連絡を取り合うようになり、「昭和高女があったおかげで働くことができた」と感謝の言葉を伝えられた。「伯父が結んでくれた縁。教えられた沖縄のこと、戦争のことを、山梨に住む私たちが伝えていかねばならないと感じています」 （敬称略）

〈中嶋寿美子〉

過去と未来つなぐバトン

「沖縄から電話です」。2010年、甲府・池田小校長（当時）だった高野裕(67)＝甲府市＝は1本の電話を受けた。相手は沖縄昭和高等女学校の同窓生を名乗る女性。慰霊碑建立にあたり、創設者八巻太一のかつての勤務校にも記念品を贈りたいとの申し出だった。

その年の暮れ、同小教諭の三枝幸(52)＝中央市＝は冬休みにビデオカメラを持って沖縄に飛び、元女学生4人に聞き取りをしている。「今、聞いておかねばならない」。そんな使命感に駆られて、沖縄戦の記憶を伝えるビデオレターの教材を作った。

「兵隊さんの包帯をほどくと、うじ虫の塊がぽとんと落ちて。腕には穴があいているの」。翌年、保護者を交えた平和学習では、テレビ画面から語りかける声に、児童がじっと耳を澄ませた。

八巻が沖縄に渡り100年になる頃から、山梨の教育現場と沖縄の交流は活発化してきた。甲府一高の生徒は修学旅行で沖縄県糸満市の梯梧之塔を訪れ、昭和高女の同窓生と面会。昭和・押原中では、八巻の生涯を演劇にして上演している。

「戦争の話を沖縄の子どもたちも知らない。先生が知らないから。私たちが口をつぐんでいたから」。元女学生の上原はつ子(92)＝那覇市＝は後悔を口にする。思いは関係者を動かし、17年に犠牲になった21校全学徒隊の合同碑建設につながった。

高野の家には退職した今も上原から近況報告が届く。同封された、合同碑の除幕式や沖縄戦の慰霊の日、米軍基地を巡る動きを伝える新聞記事からは、沖縄県民の切実な願いがにじむ。「教育に携わる者として、伝えてほしい、というメッセージを明確に託されている」。100年前の教育者と教え子から、沖縄と山梨、過去と未来を結ぶバトンがつながっている。 （敬称略）

〈中嶋寿美子〉

＝次回は9月上旬に掲載します

紙面・記事・写真・イラスト等の無断掲載・転用はお断りします。Copyright 山梨日日新聞社